

## 5. 菅浜の組織と年中行事・盆行事

長谷川 巴南・石橋 茉莉

### 1. はじめに

本稿は福井県三方郡美浜町菅浜区の組織と行事、特に盆行事に関する報告である。2019年8月9日に美浜町を訪れ、菅浜区在住の浜野健治氏に聞き取り調査をおこなった。聞き取りで確認できた事項をまとめ、報告する。

### 2. 菅浜の組織

まず菅浜の組織、特にカイト（街当）について報告する。

#### (1) カイト

現在、菅浜区の戸数は124戸であるが、この中でカイトに属している戸数が確認できる限りで119戸であった。この合計数は2001年の集落基礎調査による113戸という統計結果よりも多い。菅浜区の人口が増加傾向にあるという話とも矛盾しない。表1は今回の聞き取りによるカイトと戸数の一覧で、変化があったカイトには下線を施した。ほぼ均等に戸数が増加していたが、減少しているカイトもある。特に松ノ下から金芽にかけての北東側の海岸沿い地域の戸数が増加していた。

聞き取りではカイトの地図上における区分・範囲が確認できた。カイトには寺社やお堂の名前を冠したものが多く、菅浜区に存在するそれらの位置と関係があると考えられる(図1)。

地図に示した寺社やお堂のうち、弘法、文殊、金比羅を冠したカイトはその神仏の周辺にカイトが存在していたが、長納寺は実際に長継寺がある場所とは異なる。長納寺は1925年の大火を契機として光明庵と合併し、現在は長継寺となっている。この場所に長納寺があったとするならば地区の8割を襲った大火の影響を受けたと予測でき、長納寺が現在のカイト周辺に

表1 カイトと戸数の変化

| 集落基礎調査 (2001年)  |
|---|
| 弘法6戸、北文殊8戸、南文殊10戸、浜ノ町7戸、長納寺4戸、宮本10戸、仲川6戸、清水5戸、中筋6戸、新6戸、安丸7戸、上所6戸、奥所5戸、米屋5戸、金芽5戸、金比羅6戸、中ノ間5戸、松ノ下6戸 |
| 聞き取りの結果 (2019年8月)   |
| 弘法6戸、北文殊9戸、南文殊7戸、浜ノ町6戸、長納寺4戸、宮本7戸、仲川10戸、清水5戸、中筋6戸、新6戸、安丸10戸、上所6戸、奥所7戸、米屋5戸、金芽7戸、金比羅4戸、中ノ間6戸、松ノ下8戸 |

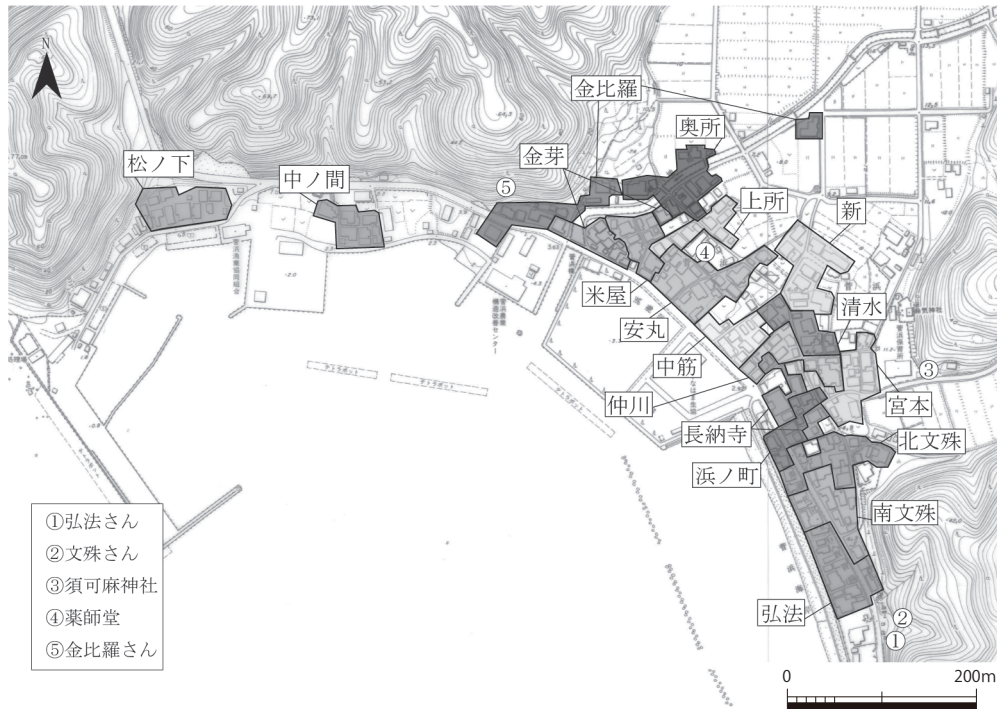


図1 菅浜のお堂・神社とカイトの区分 (町 2500 分の 1 地形図をもとに作成)

あった可能性は大いにありと考えられる。

現在、カイト内で葬式などに助力し合うことはおこなわれなくなっており、カイトは主に伝達事項を回す単位として機能している。区長から配布される回覧の始点がカイト総代であり、6軒のカイトであれば1～2日程度あれば回覧は回りきる。カイトをまとめるのがカイト総代であり、年ごとに変わる。総代には、回覧を回す、地区の役や行事・神事に必ず出席し点呼をとるなどの役目がある。現在、高齢化・生活の多様化によって全ての家が役・社会奉仕（草刈り）に参加できる状況ではないため、カイト総代が代わりにおこなうこともある。区が決めた役に出ない場合、「出不足」として男性4千円、女性3千円を支払うこともあったが、事情があれば今は免除される。

## (2) 祝番・宮世話

続いてカイト以外の組織について述べる。「祝番」は月々の神社の掃除、初詣・祭礼・干灯の準備と後始末、宮世話の指示に対する支援をおこなう。任期は1年、北から10軒ずつ持ち回り、亡くなった方のいる家は飛ばされ、翌年祝番を受け持つ。「お日待ち講」は任期1年で、こちらは南から10軒ずつ持ち回る。長継寺住職から般若心経を頂く行事をおこなう。「宮世話」は須可麻神社・金比羅宮・山の神・愛宕神社の年間行事の管理や月例祭・祈祷・お賽銭の回収といった神社に関する世話役を担う。12月31日には初詣の準備をする。任期2年、定員2名の選挙制（毎年1名は順送り）である。「文殊講」と「弘法講」は村の入り口にある文殊堂と弘法堂を管理する有志十数人による組織である。

これらの組織があるため祭事に対して菅浜の人々は非常に協力的である。精霊船の作成に用いる藁の組み立てから装飾の折り紙や花傘に至るまで、老若男女関係なく菅浜全体が船造りに協力している。カイト総代によって藁や折り紙が配布され、それらを各戸で仕上げ、船の作成

に用いる。こうして住民全体の手が加えられた船ができあがるのである。毎年8月中旬におこなわれる「すかまフェスタ」という夏祭りも青年会が主催で住民全体が参加する。

### 3. 菅浜の行事

菅浜の現在の行事について表2にまとめた。聞き取りをおこなった三つの行事について以下で述べる。「戸祝い」は1955年頃までおこなわれていたが、現在はおこなわれていない。菅浜の隣にある北田では現在も実施されている。基本的には子ども達が太鼓を叩き唱え言を唱えながら各戸の玄関前にある木を叩き歩く行事だが、菅浜の戸祝いは実物の玄関の戸を叩くものであった。戸が破壊され怪我の危険性も高いため、中止された可能性がある。「年ごもり」は12月31日の晩からおこなわれる行事で、青年たちは須可麻神社に年籠りをし、108つの除夜の鐘が鳴り終わると全員で御神酒を頂く。その後社前で一同参拝し、お祝い唄をうたって社殿を3回まわり、威勢よく歌いながら村通りへ降り金比羅神社に向かう。「歌い下がり」は、現在、青壮年会の十数名でおこなわれているが、かつての参加人数は現在よりも多く、22時頃から集まり飲み食いをした後に、歌い下がりをして大変盛り上がっていた。菅浜独自の行事で現在もおこなわれている「焼け年忌」は、1925年5月31日に菅浜の125戸のうち105戸も家が焼失した大火があり、もう二度とそのような火災に見舞われないようにと願って毎年5月31日におこなわれる祭祀である。1週間前よりカイト内で庚申講を営み、当主が須可麻神社で宮籠りをする。当日は村中が休みとなる。加えてカイトを単位として南北ごとの当番制で、毎日火の用心をふれて回る取り組みもおこなわれている。

聞き取りでは大火後の村のあり方についても尋ねた。大火の後に人口の大きな変化は無かった。その原因として1947年まで電気も通らず、情報や交通が未発達で他地域との往来が頻繁ではなかったため、移住が困難であったことが挙げられる。

火災後の影響として①長納寺と光明庵の合併、②道が広がり中ノ間と松ノ下のカイトが増加、③毎日、拍子木で火の用心をふれて回る取り組みがおこなわれる、④早い段階で藁葺きから瓦葺きになる、⑤炭焼きの開始、⑥生活協同組合の誕生、が挙げられる。⑤の炭焼きに関して、国有林であった山が1930年に区に返還され区有林となった経緯があり、その山を使って炭焼きをおこない、1965年頃まで生業としていた。一時、休止していたが2000年から再開し、

表2 菅浜の行事

| 月   | 行 事                            |
|-----|--------------------------------|
| 1月  | 歌い下り、初詣、正月さん、ツクリゾメ、お日待ち講(5、6日) |
| 2月  |                                |
| 3月  | 神社月例祭、愛宕山祭礼、涅槃(15日)            |
| 4月  |                                |
| 5月  | 焼けの年祈と宮籠り(31日)                 |
| 6月  | 須可麻神社例祭(2日)、能祭り(17日)、お大師講(20日) |
| 7月  | 祇園さん(7日)、金比羅さん(10日)、社会奉仕作業     |
| 8月  | 施餓鬼供養(15日)、精霊船送り(15日)、干灯       |
| 9月  |                                |
| 10月 | 敬老会(下旬)                        |
| 11月 | 神送り、文殊講(25日)                   |
| 12月 | 神事講、山の神講、年籠り(31日)              |

荒れた山の再興と炭焼き技術を残そうとする試みが続いている。⑥の生活協同組合は火災後に銭湯として使用された建物で酒類を皮切りに様々な食品が販売され始め、共同販売所として住民が集まる憩いの場所になったもので、現在でも菅浜区の生活を支えている。浜野氏が2004年に組合の理事長になった際に、組合の存続を協議したそうだが、周囲にコンビニもスーパーもない菅浜区で買い物弱者を生まないためにも、組合は続いている。

浜野氏は「心の拠り所があると人が集まってくる」とおっしゃっており、かつて存在していた地蔵盆を8月23日に復活させたことに加え、月に1回のわくわく食堂開設を考えている。このように地域の人々が集い交流する機会を設けることは菅浜の運営や組織づくり、伝統の継承を円滑におこなっていくためにも必要なことだと考えられる。(長谷川巴南)

#### 4. 菅浜の盆行事

続いて盆行事について述べる。菅浜区に住む全世帯の約66%が曹洞宗であるため菅浜の盆行事の主流であると考えられる。盆行事がいつから始まるという感覚はないとのことであったが、8月7日に七日盆をおこなっているそうなので、ここでは7日を菅浜の盆の始まりとする。

##### (1) 7日(七日盆)～13日(棚の飾り付け、墓参り・掃除・経、先祖の迎え)

7日の七日盆では朝、家族で墓参りに行き、ミラカケ、ボンバナ、コギクを主とした仏花を束にして持って行く。また一つの墓ごとに切ったウリとナスビ、ササゲマメ、だんご二つを供える。13日の午後から長継寺住職、天理教会会長が檀家の家へ訪れ、経(祝詞)をあげてもらう。13～16日の夕方までに当主は墓参りに行く。墓には束にした仏花、切ったウリ、ナスビ、ササゲマメとだんご二つを供える。それまでに供えていたものは廃棄する。

盆には盆棚・盆の仏壇という棚を特別に作り、そこに飾り物や供え物を置く。寸法は大きい物で幅1間、1間半であり初盆の人と普通の盆でも変わらない。まず普通の仏壇に安置されている阿弥陀像を盆棚に移すため普通の仏壇は中央が空となる(写真1)。盆棚は3段に分かれており上段の右には十三仏、左には観音像と西国三十三箇所朱印(大きい家は四国八十八箇所朱印を飾る)の掛け軸や仏花を飾る(写真2)。仏花はミラカケ、ボンバナ、コギクを主とする。中段には仏性膳と呼ばれる膳や葉の上にウリ、ナス、トマト、ササゲマメなどを置き、お茶などを供える。下段には総膳そうぜんと呼ばれる毎日置くお膳で仏性膳と総膳は日によって献立が決まっている。初日(13日)の仏性膳の内容は小豆と餅のぜんざい、煮物、汁物で総膳は3杯の小豆と餅のぜんざい、煮物などである。そのほかには日本酒、果物、経、麻木10本が刺された白ご飯が置かれている(写真3)。普通の仏壇にも仏花、ウリ、ナス、ササゲマメを供える(写真1)。

##### (2) 14日(盆棚への供え物)～15日(施餓鬼参り、精来船による精霊送り)

2日目(14日)のお膳の内容は、仏性膳が赤飯と汁物、カボチャ、レンコン、白豆などの煮物、総膳は3杯の赤飯と白豆の煮物と和え物であった。総膳の左には乾燥した麻木10本を刺した白御飯が置かれている。中段にはお膳の他に、お茶、ウリ、ナス、ササゲマメ、お菓子などが供えられている。下段には日本酒が置かれている。

3日目(15日)のお膳の内容は仏性膳がうどんと汁物、カボチャ、高野豆腐、赤豆の煮物、





写真1 仏像を移し終わった普段の仏壇



写真2 盆棚



写真3 初日の盆棚の中段と下段



写真4 施餓鬼旗

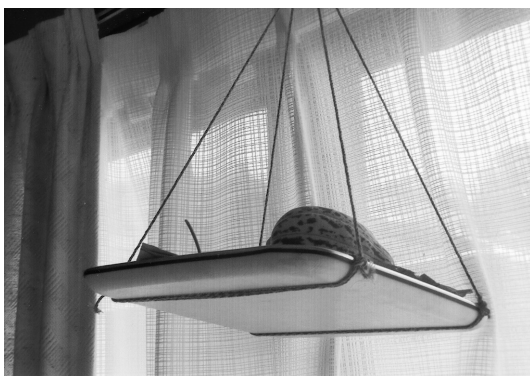


写真5 下から見た施餓鬼棚



写真6 上から見た施餓鬼棚

ゆでトウモロコシ、総膳が3杯のうどん、煮物、和え物であった。中段には3日目も総膳の横には乾燥した麻木を刺した白御飯が供えられていた。そのほかにも果物やウリ、ナス、ササゲマメ、お茶が供えられている。下段には日本酒や経が置かれている。

### (3) 施餓鬼旗、施餓鬼棚と施餓鬼参り(施餓鬼供養)

菅浜の施餓鬼旗は左から「唵麼拏駄哩吽泮吒」、「西方廣目天王」、「北方多聞天王」、「南無廣博身如来」、「南無離怖畏如来」、「南無甘露王如来」、「南無妙色如来」、「南無多寶如来」、「南方增長天王」、「東方持国天王」、「麼拏囉日哩吽」と書かれた11枚の紙の上部を三角に折って紐でつるした旗であった。真ん中の如来と書かれた5枚は上から緑・黄・赤・白・青に染められ、その他の6枚は白である(写真4)。菅浜では施餓鬼棚は室内の縁側の窓際の頭上にトレーを紐でつるし、ウリ、ナス、ササゲマメが供えられる(写真5・6)。

15日の朝8時から長継寺で施餓鬼供養がおこなわれる。僧侶が経をあげ、初盆の人は「ミズノコ」と呼ばれる竹で水を波立たせる水かけをおこなう。また昔は餓鬼にナス・ウリを刻んだものを投げていたそうである。初盆の人は「シンボトケの人」ともいう。(石橋茉莉)

## 5. おわりに

今回の調査では、菅浜の組織と盆行事を中心とする年中行事についてまとめた。時代の変化により消えていく行事、事情があり参加できなくなっていく人々の現状もあるが、それ以上に菅浜の住民それぞれが役割を担い祭事に取り組む強い結束力を感じた。聞き取りの際の浜野氏の「心の拠り所があると人が集まってくる」という言葉が印象に残った。人々が集い交流する機会を設けることは、地域の運営や組織づくり、伝統の継承を円滑におこなっていくためにも必要なことだと考えられる。

また、課題としては年中行事の中にあつた「祝番」と盆行事の関連性が挙げられる。初盆の家はその年、「祝番」の順番を飛ばされるというのは前述の通りだが、この神事は盆行事とはどのような関わりがあるのか、もし関わりがないのならば穢れの意識とはどこまで及ぶものなのかについては今後の課題である。(長谷川・石橋)

## 謝 辞

本稿に使用した写真はすべて浜野健治氏より提供を受けた。記して感謝したい。

## 参考文献

- 水本邦彦 1987「近世の村組と村—近江浦生郡中野村を中心に—」『京都府立大学学術報告(人文)』第39号(水本邦彦 1993『近世の郷村自治体と行政』東京大学出版会に再録)
- 美浜町誌編纂委員会 2002『わかさ美浜町誌 美浜の文化 第1巻 暮らす・生きる』美浜町
- 和歌森太郎 1974『若狭の民俗』吉川弘文館